

Title	正義者同盟成立の歴史的意義（その一）： 黎明期におけるドイツ労働運動の国際的性格にかんする考察
Sub Title	The historical significance of formation of "the League of Just" : an essay on the international orientation in the German working-class movement in the nineteen-thirties (1)
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.5 (1964. 5) ,p.393(31)- 414(52)
JaLC DOI	10.14991/001.19640501-0031
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640501-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (注27) M. Friedman, *ibid.*, p. 28-30. 参照。
 (注28) M. Friedman, *ibid.*, p. 30.
 (注29) M. Friedman, *ibid.*, p. 30. この場合はピグーが「厚生経済学」においていう私的限界生産費と社会的限界生産費の離反と全く同じである。ピグーもこの場合、国家干渉が必要であるという。
 (注30) M. Friedman, *ibid.*, pp. 30-31. 参照。
 (注31) M. Friedman, *ibid.*, pp. 31-32. 参照。
 (注32) M. Friedman, *ibid.*, pp. 33-34. 参照。
 (注33) M. Friedman, *ibid.*, pp. 35-36. 参照。
 (注34) M. Friedman, *ibid.*, p. 174. 参照。
 (注35) M. Friedman, *ibid.*, p. 176. 参照。所得分配に関するフリードマンの考え方は『資本主義と自由』の第十章「所得の分配」において詳述されているが、ここでは結論的部分だけを紹介した。
 (注36) フリードマンは『資本主義と自由』の第三章「貨幣の統制」において、このような提案を試みている。
 (注37) M. Friedman, *ibid.*, p. 79.

正義者同盟成立の歴史的意義(その一)

——黎明期におけるドイツ労働運動の国際的性格にかんする考察——

飯 田 鼎

- 一、一八三〇年代のドイツ労働者階級の性格——手工業プロレタリアート
- 二、パリにおける「人民協会」の成立
- 三、手工業プロレタリアの共産主義の萌芽(未完)

十九世紀初頭のヨーロッパの労働者は、多くその技術と熟練を練磨するため、ヨーロッパ各地を遍歴することが慣習的に行われていた。イギリスのような島国でさえ、このようないわゆる「トランピング」⁽¹⁾ ("tramping") は、十八世紀以来、支配的な現象となり、それが職能別組合形成の重要なモメント⁽²⁾ となったことはよく知られている。ヨーロッパ大陸においても労働者の技倆鍛錬のための渡り歩きは、たとえば十九世紀初頭のドイツの労働者の場合は、フランスおよびスイスなどに遊んだのであって、その意味では、ヨーロッパのプロレタリアートは、最初から国際的な連帯の精神を容易にうけいれる立場にあった。しかしながらこの場合の「労働者」とは、近代的な工場労働者、いわゆる工業プロレタリアートを指すものではない。

正義者同盟成立の歴史的意義(その一)

く、多分に前近代的な職人的意識をもちながら、実際には自己の労働力以外に売るべき何物ももたないプロレタリアートにほかならないという前近代的な性格と近代的なそれとの混淆的な存在、もしくは前者から後者への過渡的な形態であったことは注意されなければならない。すなわち「手工業職人」(die Handwerker)と呼ばれたこれらの労働者は、あくまでもドイツ資本主義の発展が生み出した特殊な労働者の類型であり、ドイツ資本主義の後進性の産物であった。黎明期のドイツ労働運動の性格を明らかにするためには、われわれは、どうしてもこの「手工業職人」について分析しておかねばならない。

フリードリッヒ・エンゲルスは、イギリスのチャーティストの新聞「ノーザン・スター」の一八四五年一〇月二五日付、第四一五号において、その編集者フーガス・オコンナーにあてて、一八世紀のドイツ人民の状態について、つぎのように書いている。

「王、大司教、または諸公の治下にあつて、ひとりだちできない貴族もまた、つねに人民を犬畜生以下に取り扱い、自分の農奴——当時のドイツではどこでも農奴制がおこなわれていた——の労働から、できるかぎりの金をしぼりあげていた。とくに自由を強調されていた諸都市でも、自由のしるしは少しもみられなかった。というのは、ここでは、市長や自選の市会や役所が、何世紀ものあいだに、帝位と同じく世襲化してしまつていて、皇帝よりひどい専横で支配していたからである。これらの都市ブルジョアジー、貴族の悪虐行為にならびうるものはない。実際もし当時を知る多くの人々がいまもそれをおぼえているのでなかったら、またもしそれを証明する無数の証拠がなかったら、五〇年前のドイツの状態がこんなだったとはとても信じられないであろう。ところが人民ときたら！人民はこういう状態にたいしてなんといったか？彼らは何をやったか？まず中間階級、守銭奴のブルジョアは、このうちつづく混乱状態のなかに、富の源泉を見いだしたのだ。彼らはどさくさまぎれの時こそいばんもうかることを知っていた。彼らは抑圧され侮辱され

るのをがまんした。自分の敵にたいして、彼ららしいしかえしをすることができたからである。彼らは、その抑圧者をあざむくことによつて、その被害のしかえしをした。もし人民と手をにぎったら、彼らは、イギリスの中間階級が一六四〇年から一六八八年のあいだに部分的にやつたように、ふるい支配体制をくつがえして帝国を再建することができたかもしれない。しかし彼らにはできなかった。ドイツの中間階級はそのようなエネルギーをもたず、またそのような勇氣をもつふりさえもなかった。彼らはドイツがこやしだめ以外のなものでもないことを承知していた。だが彼らはこやしだめのなかが居心地がよかった。彼ら自身がくそにほかならず、自分のまわりのくそでぬくぬくと暮っていたのだから。それに勤労人民は、農民をのぞけば、いまよりも暮しが悪かったわけではなかった。ただ農民だけは、たいいてい農奴で、都市のたすけがなければ何もできず、いつも傭兵の宿舎を割りあてられ、その傭兵がまたあらゆる反抗の企てを流血のうちにおしつぶそうとしていたのだった。

以上が、前世紀末ごろのドイツの状態であつた。それは、すみからすみまで完全に、腐敗と胸の悪くなるような退廃の生けるかたまりであつた。安んじていられるものはだれひとりなかった。この国の交易、商業、工業、農業はほとんど無にひとしい状態に陥つていた。農民や商人や製造業者は、吸血鬼のような政府と不景気との二重の圧迫を感じていた。貴族や諸公は、その臣民に苛斂誅求をおこなつていたにもかかわらず、増大する支出に収入の歩調をあわせることができなかった。いっさいがまちがつていた。そして全般的な不安が国中をおおつていた。教育もおこなわれず、人心操作の手段も講じられず、出版の自由なく、公共精神なく、他国との広範な通商すらなく、——いやしさと利己心——全人民に浸透するいやしく、ずるく、あさましい小商人根性のほかは、なにもなかったのである。すべてが朽ちはて、たおれかかり、急速に滅亡にむかつていった。好転ののぞみはみじんもなく、死んだ諸制度のくさりきつた死体をはこびさるだけの力さえ国民のなかにはなかったのである。⁽³⁾

以上、ドイツの状態にかんするエンゲルスの文章を長々と引用したのは、一八四五年という時点において、資本主義の祖国、そして労働運動の古典的発祥地イギリスには労働者の革命的運動「チャーティズム」が吹き荒れているという状況、そしてフランスでは一八三〇年の革命後、ブルジョアジーの政治的勢力が次第に強くなりつつあるという条件のなかで書かれたものであり、従ってこの一文のなかには、これら二つの先進国にたいする故国ドイツのおくれた状態との明瞭な対比、封建的な残滓の拭いがたい痕跡にたいするやるせない忿懣と憂うつ、卑屈なドイツ・ブルジョアジーにたいするこの上ない軽蔑と慨嘆が、もつとも生き生きと吐露されているからである。

そして更にこのような背景のもとでドイツの労働運動もはじめられたとすれば、そこには、何程かその運動にドイツに特有な諸特徴が投影されたことは当然であるといわなければならない。それはおよそ、ドイツのプロレタリアートの創出過程にかかわる問題である。再びエンゲルスの表現をかりるならば、一八四七年三月に彼が書いたと思われる論文「ドイツのスタトゥス・クオ」の中で、つぎのようにのべられている。

「さて、無産の、一般に労働している階級はどうだろうか？ この階級についてはやがてもつとくわしくのべる場所にくるだろう。さしあたり、ここでは、その分散性を指摘しておけばよい。作男、日雇労働者、手工業の職人、工場労働者およびルンペン・プロレタリアートにみられるこの分散性は、少数の微弱な中心地しかたぬ、人もまばらな広大な地域に、彼らがちらばっていることに関係があるのだが、すでにそのことのために、彼らはたがいその利害の共通性について理解しあい、意志を疎通させあつて、一つの階級へと結集することができないのである」⁽⁴⁾

三〇年戦争以来、ドイツはフランスおよびロシアの政治的干渉のもとに分裂させられ、一八〇三年の帝国代表主要決議によって神聖ローマ帝国の再建のもとにその矛盾は深められ、そして最後にドイツはウィーン会議であらたに、主としてロシアによって、つぎにはイギリスとフランスとによって、二百以上の、大小の特別な地片を有する三六の国家に分割せられ

だ。⁽⁵⁾

こうした国家的な分裂の悲劇の影響がまず初期の労働運動に投影されていることは、フランスやイギリスの労働運動にはみられないところであろう。政治的な諸関係と資本主義の成熟の段階におけるきわだった差異のために、イギリス、フランスおよびドイツにおける労働運動の歴史は、図式的に均等に発展したものと考えられるべきではなくして、各国における労働運動の成立および発展にみられる確実な特殊性は、一部は、プロレタリアートの階級意識および組織の程度に、運動のひろさに、反対陣営内部における立場および政治的な綱領のなかに、いちじるしい相違をあらわすのがつねである。⁽⁶⁾ 実際イギリスのプロレタリアートは、国際的なプロレタリアートの闘士として、後代のマルクス主義の天才的な多くのものを先に実行した⁽⁷⁾。またフランスにおいては、一八三〇年の七月革命以後、プロレタリアートはいちじるしい階級的成熟をみせ、一八三〇年から三四年にかけての革命的な昂揚を象徴するリヨンにおける蜂起において、武装したフランスの労働者が十日間にわたつて、フランス第三の都会を支配し、政府の優勢な軍隊に英雄的に抵抗したという事実、フランスのみならず国際的なプロレタリアートの意識をたかめるのに大きく貢献した。しかしドイツにおいては、さきにエンゲルスが鋭く指摘したような資本主義における後進性の結果としてのブルジョアジーの脆弱性、小封分立の結果としての国内市場の狭隘、プロレタリアートの局地的偏在および分散化にともなう階級的未成熟などのために、イギリスやフランスとは異なり、「働く大衆」を蹴起させるための槓杆に欠けていた。つぎに掲げる表は、一八〇〇年から一八四〇年までの時期について、ドイツ、イギリス、フランスおよびアメリカ合衆国の四カ国における人口、鉱業生産、製造業、石炭業、銑鉄、外国貿易のそれぞれに関する比較統計表で、ユルゲン・クチンスキーの作成によるものである。⁽⁸⁾

これらの表をみても明らかのように、この時期のドイツは、人口においてフランスにはるかに及ばず、鉱業生産では、イギリスのわずかに一〇分の一、石炭の生産量においてようやくフランスに優り、銑鉄生産ではアメリカ合衆国にはるかに劣

〈第1表〉 人口, 1800~1840 (単位 100 万人)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1800	23	16	27	5
1820	27	21	30	10
1840	33	27	34	17

〈第2表〉 鉱業生産
(但し貴金属を除く, 単位 100 万ポンド)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1801~1820	12	123	13	4
1821~1840	23	204	27	7

〈第3表〉 製造業生産 (単位 100 万ポンド)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1800	60	230	190	25
1820	85	290	220	55
1840	150	387	264	96

〈第4表〉 石炭生産 (単位 1000 トン)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1800	300	10100	800	—
1820	1500	12500	1100	2
1840	3400	30000	3000	2100

〈第5表〉 鉄鉄生産 (単位は 1000 トン)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1800	40	190	60	40
1810	45	250	?	55
1820	90	370	140	110
1830	120	680	225	180
1840	190	1390	400	290

〈第6表〉 外国貿易 (単位は 100 万ポンド)

年	ドイツ	イギリス	フランス	アメリカ合衆国
1800	36	67	31	17
1820	38	74	33	23
1840	57	114	66	41

り、そして外国貿易ではイギリスの二分の一という、全体としての経済的発展は、アメリカ合衆国を除く三国中最下位にたった。

一八〇〇年から一八一〇年にかけて、農業人口は全体の五分の四に達し、一八四八年当時ようやく三分の二に減少したといふのであるから、ドイツはまだ農業国としての色彩の濃い国であつた。いうまでもなく、ライン・プロイセンには、すでに三月革命以前に近代的市民社会が形成され、繊維産業を中心とする軽工業や機械・金属工業が発展していたが、しかし、概して一八四八年以前のドイツの工業は、工場制手工業Ⅱマニユファクチュアの段階を充分に克服していなかったであつ

て、マニユファクチュア労働者が、手工業者と本質的には変わらない方法で生産をつづけ、生産の基礎が手の熟練 (das Handwerksgeschick) に依存していた限りでは、資本家的な搾取Ⅱ階級関係は露骨な形ではあらわれなかった。だが一般に、マニユファクチュアの発展は独立小生産者としての手工業者を犠牲とし、彼らの生活を根底から破壊し、手工業親方および手工業職人の急速な窮乏化¹²⁾を通じてのみ実現される。このようにして一八三〇年前からドイツの産業発展のテンポの上昇とともに手工業プロレタリアート (das Handwerksproletariat) が成立するのである。ますます多くの親方が、かつてのように、名目的にも独立の商品生産者としてもどまりえなくなり、商人や問屋に雇用される家内労働者とならなければならなかった。製靴工、仕立業者、家具師、室内装飾家、錠前師、製本業者などの独立小生産者たちは、資本主義体制の創出と確立のための経済的社会的変革の過程の中で、資本家的な賃労働関係にまきこまれていったことはいうまでもない。マニユファクチュアの発展とこれにともなう資本による独立小生産者からの収奪、従つてその窮乏化の過程、それは実に、工場制工業への移行にとって不可欠のそしてまた不可避の段階であり、またそのためにこを来るべき大工業にそなえて多くの熟練労働者を必要とせざるをえないのである。「マニユファクチュアは、労働者の等級制的編成とともに熟練労働者との間の単純な区分をつくり出すのではあるが、前者の優勢なる影響によつて後者の数はなお甚だしく制限されている……依然として手工業的熟練がマニユファクチュアの基礎である」¹⁴⁾。そしてこのような手工業熟練を誇る労働者の中から、初期のドイツ労働運動の担い手があらわれたのである。一八四八年以前のドイツには、独占的にプロレタリアの性格をもつ大衆運動のための物質的・政治的な諸条件が欠けていた。そのような条件は当時、ただイギリスにのみ存在しえたのである。十九世紀初頭のドイツの労働運動は、まさしく、エンゲルスによつて指摘されたように、¹⁵⁾ つぎのような特徴をもつ労働者層によつて担われることにおいて、イギリスの労働運動ともフランスの労働運動とも異なる性格が刻みこまれたといふべきである。

(一) その担い手として、主として出稼ぎ労働者 (Wanderarbeiter)、すなわちプロレタリア化された手工業職人 (der Hand-

verkseselle)。

(一) 放浪生活の経験は、プロレタリア的意識の発展を促進する。

(二) 政治的に意識の高い分子は、労働者の少数部分をしめてにすぎない。

工場プロレタリアートではなく、手工業職人であり、むしろルンペン・プロレタリアに近かったウィルヘルム・ウァイトリングが獲得したドイツ労働運動における高い地位は、何よりも、その特殊性の探求によってのみ、正しく評価しうるものであろう。

- (1) 「トラランピング」にかんする研究としてはホブズバウムの論文が有益である。E. J. Hobsbawm, *Tramping Artisan*. (Economic History Review, Vol. III, No. 3, 1957.)
- (2) トラランピングについては労働運動史にかんする大抵の研究書がふれてゐる。(H. Pelling; *History of British Trade Unionism*, 1963, London. Jefferys; *Story of Engineers*, 1945, London. H. J. Fyfe and H. Collins; *Foundry Workers*, 1959. Kidder; *The Old Trades Unions*, 1931. など)を参照。とくに後者は興味深い。
- 最近わが国では企業別組合の再検討をめぐる研究が盛んであり、これに関連してこの問題に関心がもたれてゐる。例えば鼓肇雄氏「十九世紀におけるイギリス労働組合の tramping system について」『経済科学』Ⅷの2 (名古屋大学経済学会) 一九五九年。
- (3) Marx & Engels Werke, Bd. 2: SS. 565-566. (Institut für Marxismus-Leninismus, beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1957.) 邦訳 大月版「マルクス・エンゲルス全集」第二巻五九一—五九二頁。
- (4) Ebenda, Bd. 4, S. 49. 邦訳第四巻四七頁。
- (5) エンゲルス「歴史における強力な役割」大月版「マルクス・エンゲルス選集」第十六巻、三八七頁。
- (6) Werner Kowalski; *Vorgeschichte und Entstehung des Bundes der Gerechten*, 1962, S. 24.
- (7) W. I. Lenin; *Die dritte Internationale und ihr Platz in der Geschichte*, in: *Ausgewählte Werke in zwei Bänden*, Berlin, 1952, S. 551.
- (8) Jürgen Kuczynski; *Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter den Kapitalismus, Teil I. Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland von 1789 bis zur Gegenwart, Darstellung der Lage der Arbeiter in Deutschland von 1789 bis 1849*, 1961, Berlin,

SS. 89-91.

- (6) Kowalski; Ebenda, S. 29.
- (10) ゾンバルトは、十九世紀初頭のドイツ経済について、つぎのようにのべている。「かつて一八三〇年の終りに、商品としてドイツが外国に提供しなければならなかったところのものは、さまざまな産業、たとえば、綿織物、毛織物、リンネルおよび絹織物……木材・小間物および陶器産業等の製品であった。それらは本質的には、それらの原料はドイツにおいて獲得された生産物である。しかもそれらの場合には、技術的な変革が、その価格に本質的に影響をあたえなかったのである。むしろそれらの商品の製造の場合には、進歩した国々と比較して、その当時のドイツが示しているように、安い労働賃金が、ドイツの産業に決定的に有利に作用したのである」。
- 低賃金の国、農業国ドイツの状態をうかがわせるが、さらに結論的につぎのようにいう。「まず第一に、ドイツは、その土地からみずから消費するよりも多くの生産物(食料品および原料)を取得する。第二にドイツはもっとも重要な産業部門の二つ(紡糸および鉄の取得)の点で外国に依存している。結論的にわたくしは、つぎのことにふれないわけにはゆかない。つまり、農業人口が……、非常に多くの部分(einen so starken Bruchteil)をしめてゐるところの一八三〇年代のドイツを考えたときに、外国にたいするその立場とちがふのは、『農業国』(„Agrarstaat“)として特徴づけざるをえない」(Werner Sombart; *Die Deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert und im Anfang des 20. Jahrhunderts, Eine Einführung in die Nationalökonomie*, Stuttgart, 1954, SS. 41-43.)
- (11) Marx/Engels, Werke, Bd. 7, S. 116. 邦訳一二二頁。「第二にラインプロイセンは——そして、この点がライン左岸の他の諸地方に比べて、ラインプロイセンがまさっている主な点である——全ドイツでもっとも多様な工業をもっている。アーヘン、ケルン、デュッセルドルフの三県には、ほとんどあらゆる工業部門が存在する。ここでは、木綿、羊毛、絹を加工するあらゆる各種工業、およびそれに依存する漂白、捺染、染色の諸部門や、鋳鉄業、機械工業さらに鉱業、兵器鍛工場、その他の金属工業が、数平方マイルの地域に集中されていて、ドイツではこれまでみられなかったほどの稠密な人口がこれに従事している」。
- (12) 「さらに、資本主義的家内労働は、不可避免的に、きわめて非衛生的な作業環境とむすびついている。働き手のまったくの貧窮、ならぬ規則で労働条件を規制することのまったくの不可能、寝泊りの場所と作業の場所との合体——こういったことが、家で仕事をしている労働者の住居を、衛生上のだらしないさや職業病の根源地にかえる条件である。大きな企業経営では、こういう現象にたいする闘争がまだ可能であるが、家内労働は、この点で、もっとも『自由な』形の資本主義的搾取である」(V. I. レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」大月版「レーニン全集」第三巻四六一頁。
- (13) 「マニファクトチュアから工場への移行は、数世紀かかって獲得された職人の手工的技巧をくつがえす完全な技術的変革を教示する。そしてこの技術的変革のあとには、社会的生産関係のきわめて急激な破壊、生産に参加する人々の種々の群のあいだの決定的な分

裂、伝統との完全な断絶、資本主義のすべての暗黒面の尖鋭化と拡大、それとともに資本主義による労働の大規模な社会化が、不可避免的に進行する。このように、機械制大工業とは、資本主義の最後の言葉であり、その消極的な、また『積極的な諸契機』の最後の言葉である（レーニン、前掲書四七三頁）。

(14) K. Marx: Das Kapital, Bd. I (Marx/Engels Werke, Bd. 23, S. 389) 邦訳、岩波文庫版向坂逸郎訳「資本論」第一卷第三分冊、一〇二頁。

(15) F. Engels: Revolution und Konterrevolution in Deutschland, (Marx/Engels Werke, Bd. 8, S. 11. 邦訳、全集第八卷一〇—一頁)。

二

一八三〇年代におけるドイツの自由主義運動は、小国の憲法制定運動のなかにその主流がみられた。バイエルン、ウエルテンブルク、バーデンおよびハノーバーなどにおけるそれであって、フランス七月革命の影響を強くうけたものといえよう。それと同時にドイツ統一を要求する国民運動、革命的な動きは、ドレスデン、ライプツィヒ、ブラウンシュヴァイク、カッセルおよびゲッティンゲンにおいて一八三〇年から三年の間にかけてもつとまはげしくわき上り、とくにポーランド独立の闘争にたいする支援デモの拡大とともに、祖国協会 (Vaterlandverein)、出版協会 (Pressverein)、ハンバッハの祭 (Hambacher Fest) などの民主的な人民の集会が催された。ヘッセンにおける農民の叛乱⁽³⁾、一八三三年四月のフランクフルトの人民の⁽⁴⁾げしい覚醒などに象徴されるように、ドイツ人民の民主的な要求は歴史上比類ないほどにたかまったのであるが、封建的・反動的な支配階級のこれにたいする憎悪もはげしく、警察力をもつておしつぶされる結果となった。コワルスキーによれば、一八三八年までに、二三の連邦国で、一八〇〇人が革命的陰謀をもつて裁判にかけられたといわれ、⁽⁵⁾そのなかには非常に多くの手工業職人がいた。こうした酷烈な弾圧の結果は、陰惨な祖国を逃れてフランスに集まり、パリは一時ドイツ革命運動の中心地となった。当時、パリにおけるドイツ人の数は、ロレンツ・フォン・シュタイン (Lorenz von Stein) によれば

七〇、〇〇〇人、エヴェルベック (Ewerbeck)、グッツコウ (Gutzkow) およびルーゲ (Ruge) によれば八〇、〇〇〇人から八五、〇〇〇人に達したといわれる。⁽⁶⁾ いずれにしても相当数の職人が居たことは事実であり、しかも仕立工が非常に多かったことは注目すべきである。⁽⁷⁾ 指物師、仕立職人、パン焼き職人、ビール製造職人などを合わせるならば、約一〇〇、〇〇〇人にも達したかもしれない。⁽⁸⁾

一八三五年、スイスの「青年ドイツ委員会」が、三〇、〇〇〇人ものドイツ人およびドイツ人労働者の住むパリとの接触を要求した。当時、パリに滞在した亡命者、グスタフ・エールハルト (Gustav Ehrhardt) は、そこに生活している手工業職人の数におどろき、「数千の、一部は非常に教養のある勇敢な人々」といったといわれる。⁽⁹⁾ 少く見積って、五〇、〇〇〇人のドイツ人がいたとすれば、そのうち少くとも二五、〇〇〇人から三〇、〇〇〇人は指物師、仕立職および靴屋であったと思われる。ドイツ人民協会 (Der Deutsche Volksverein) は、このような状況のもとで、ドイツ統一と自由のための闘いを目的として結成された団体で、その目的は本来政治的亡命者にたいする財政上の援助という消極的なものであった。従ってそれはゆるい組織であり、月一回程度会員が集まり、亡命者の扶助の問題を中心に議論をしたり、会長や会計掛などを選んだ。会員は五〇〇名から六〇〇名程度おり、政治的な追求のはげしかった時代には一〇〇人をこえたことはなかったといわれる。⁽¹⁰⁾ 手工業職人がその高い比率をしめていた。

ルイ・フィリップの政府は、七月革命以後の大衆の革命的傾向をおそれて、これを黙認する態度をとった。七月王朝は大衆運動の指導者そのものおよび目的意識の欠如、あるいはラファイエットらの術策によって辛うじて長らえていたにすぎなかったのである。ドイツ人民協会における政治的發展のもつとも明らかな源泉は、一八三三年、パリででたちらした⁽¹¹⁾であった。それは、総会の決議の⁽¹²⁾二、〇〇〇部が印刷され、五〇〇部はパリ在住のドイツ人労働者に、あとはドイツにおくられた。一八三三年夏、南ドイツの自由主義者がドイツ人民協会の性格を規定した最初のパンフレットは、言論の自由と立憲的王朝

に完全に満足するというブルジョア的な主張によつて貫かれ、労働者の具体的な要求にふれるものではなかった。

ハノーバーのテオドル・シュスター(Theodor Schuster)とケルンのヤコブ・ヴェネデー⁽¹²⁾(Jakob Venedey)とは、一八三〇年代のドイツの政治的団体の中で小市民的傾向をもつ共和派を代表し、自由主義者のイデオロギー的支配に反対した。労働者階級としての手工業職人は、この自由主義派と共和派との対立の中で、小市民的な共和派を支持したのみならず、集会の動向を支配した。この時点では、すでに手工業職人は正面にでて、ドイツ人民協会において指導的な役割を果たすに至ったのである。すなわちテオドル・シュスターについて、マインツ出身の仕立工ヨハン・シューマッハー(Johann Schumacher)、機械工ノイバー(Neuber)、石版刷師ムスカニ(Urban Muschani)、ヒルデスハイム出身の植字工、ゴールドシュミット(Gold-schmidt)による「五人委員会」が結成されたのである。かくしてドイツ国民協会における最初の大規模な協定は、副議長ムスカニが指導した一八三三年一月一日の大会となつて結実した。

常任会計掛ノイバーは、ドイツとの連絡について報告したが、彼は最後に協会が明確な政治的相貌を保持するように、基本的な態度の声明を出すことを訴えた。出席した会員の大部分、とくにゴールドシュミットとムスカニは、フランス革命の人間の権利の宣言をもちこむことを強く主張した。七月革命にたいする闘争の反対派にイデオロギー的基礎をあたえるための闘争として、「人間の権利協会」(Société des droits de l'homme)の新委員会はロベスピエールの言葉で、人間の権利および市民の権利を公けにした。しかしながら、プロレタリアートとブルジョアジーは、すでに潜在的な市民戦争の間に立っていたし、そのことはすでにおこっていたリヨンにおける二つの蜂起が示していた。こうした状況の中で、ドイツ国民協会内部の矛盾は、平和的な方法での現存の私有財産制度の財産権の擁護、その限りでの諸階級の運命の改善、たとえば救貧税や、富の余剰の一部が、飢餓と窮乏化に悩む失業者を守るために利用されるというように、協会の規約を解釈しようとする小ブルジョア共和主義と、「人間の権利協会」にみられるフランス革命の平等の精神を徹底的におしすすめようとする手工

業職人の勢力とのはげしい対立となつて現われた。かくして自由主義派と共和派との間のイデオロギー的対立は終結した。

プロレタリア化した手工業職人は、いまや階級対立のきびしい現実に目ざめ、機械破壊や外国人労働者の白眼視という原始的な階級闘争の方法を克服しつつあった。多くの労働者——といっても指物師、印刷工、植字工、仕立工、靴工のような手工業職人であり、近代的な工場労働者ではなかったが——の間には次第に組織化が進み、一八三三年には、五二二人の労働者が、団結禁止法を犯したというので裁判にかけられたほどであった。

一八三三年にフランスをおそつたストライキの波は、一八三三年九月から十月にかけて五、〇〇〇人の大工、六、〇〇〇人の靴工、八、〇〇〇人の仕立工をしてその仕事を抛棄させた。約三、〇〇〇名のストライキに参加した仕立屋が逮捕され、バリケードの前で開かれた大集会では、労働者は武力闘争の準備をし、また一八三三年一月二〇日から二八日までの数日間、アマンディエのバリケードの前では、一、二〇〇名から一、五〇〇名の宝石職人が、また別の日には三、〇〇〇人の仕立職人がメインヌのバリケードの周辺に集まつたといわれる⁽¹³⁾。この当時のフランスの労働者は空想的社会主義者ジュール・ルー(Jules Leroux)の影響のもとに⁽¹⁴⁾、生産協同組合の建設による資本家的搾取の根絶の構想を抱くという段階であり、科学的社会主義の前段階にあった。銀行家の独裁的支配⁽¹⁵⁾の打倒のためにフランスの労働運動の革命的昂揚を利用しようとした若いフランスの共和主義者は、労働者の政治的経済的闘争を支持した。「人間の権利協会」は、一八三三年一〇月、労働者の同業組合とともに活躍する宣伝団体を建設するとともに、共和的な新聞は、労働者の請願を公表し、ストライキ中の労働者の逮捕に抗議した。「人間の権利協会」とともにいまやパリにおける一七〇の支部と三、〇〇〇人の会員をもち、フランス全土に六、〇〇〇人の会員をもつ政治的闘争を経験した組織が生まれたわけである。

パリにおけるドイツの手工業職人は、フランスの労働者と共闘して、「人間の権利協会」を模範とすることを期待した。外交的に用心深く行動していたドイツの亡命者は、労働者の急進的行動のために、フランスの官憲に黙認されていた人民協

会が非合法化されるのを何よりもおそれた。ここに人民協会内部に、小ブルジョア的共和主義的な亡命者とフランス労働者のはげしい階級闘争によって、いやが上にも熱狂的にさせられ、階級意識に目ざめた手工業職人との間の矛盾が激化せざるをえなかった理由がある。手工業職人たちにとっては祖国ドイツの労働者に、七月革命後のフランス労働者の闘争の模様、そしてそれへの彼らの直接的参加を訴えることが焦眉の急であり、それによっておくれたドイツの労働者に人間社会における階級的差別や資本家的搾取の現実を知らせることが重要で、そのほかのことはどうでもよかった。祖国ドイツの労働者に訴えるためのパンフレットの草稿をめぐるはげしい論争の中で、手工業労働者は、フランス政府による弾圧の手が、共和主義的な団体にもおびることをおそれ、これらのビラによる宣伝の完全な中止を提議した共和派との議論においても、自説を主張してゆずれなかった。一八三三年十一月、最初のビラが、翌年一月第二のビラがあらわれたのである。われわれはつぎにそのビラの内容について検討しよう。

「◎ 一八三三年十一月のドイツ人民協会のビラ

兄弟および友人諸君！

誰かがあなたのところへ来て、つぎのように話すならば、友よ、きけ。

わたしは労働するのに何の喜びもない。だがわたしとても、うまいものを食べたり飲んだりしたいし、快適な住居に住みたいし、流行の着物をきて、演劇、音楽会や舞踏会にもゆきたいと思う。——しかしあなた方は立派な拳をもち、謙遜であり、寒さや飢えからまぬがれ、しかもあなた方は、一週間に一度、ニクロイッエル銅貨で買える半リッターの酒を飲んでみずから楽しむことができれば、幸福すぎるほど幸福であると思う。あなた方は、自分で働き、あなた方の利益を自分で手にいれようとは思いませんか？ あなた方は、みずから主人公と称し、食卓で、あなたの健康を祝して、シャンペーンを飲み、勝手に規則をきめ、あなた方の名前において（但しそれは私にも有利になるように）、戦争を遂行し、外国と

談判すべきなのです。またあなた方が、礼儀正しく躰られているとすれば、あなた方は、わたしの城、庭園、馬車、馬、従者たちに驚嘆することでしょう。あなた方がもし愉快に時を過すことができるのであれば、あなた方に、毎年、競馬や花火をおごってやってもいいですよ——。しかしよくおわかりのことと思いますが、それはあなた方のお金です。従つても、誰かがこのようにあなた方に話しかけるならば、あなた方は、彼を馬鹿者と嘲笑するでしょうし、もし彼が暴力を用いようとするならば、その背中を強くうつでしょう……。

人間が必要とするところのものはすべて、労働によって得られるのです。（、、、部分は原文イタリック）穀物が成育するためには、田畑は耕されなければなりません。穀物が粉になるためには、人がそれを粉にひかなければなりません。粉がパンになるためには、人がそれをねって焼かなければなりません。神様のおぼしめしからも、法律上からも、穀物、粉そしてパンは誰のものなのでしょうか。種子を播き、とりいれをした農民、粉にひいた粉屋、それをパンにしたパン屋のものなのです。⁽¹⁶⁾

以上に引用したビラの内容は、文章こそいわゆる美文ではないとしても、手工業プロレタリアの手によって苦心の末書かれた跡が感じられる。「人間が必要とするところのものはすべて、労働によってえられる」という思想は、労働価値説のもっとも素朴な表現として彼らの実感であったのであり、また天賦・人権の思想ともいうべきものが貫流している。たとえば「いかに立派な人であつても、労働によつて、そのパンをえるのでなければ、食うことはできない」というように、ジャン・ジャック・ルソーの「人間不平等起源論」の影響などもみられるのである。ビラは、さらにつぎのように訴えつつける。

「いまやあなた方は、労働者は至るところで幸福に暮し、欠乏や貧困は怠け者のためにとっておかねばならぬというべきではないか？ ところがこれと全く反対のことがおこなわれている。というのは、もつとも貧しく、しかももつとも不幸な人々とは、大抵の、そしてもつともつらい仕事をやっている人々、つまり手工業労働者、工場労働者および農民である。

しかも大変ぜいたくに生きている人々こそ怠け者なのだ……。」
 そしてつぎのような痛烈な文句をもって結んでいるのは面白い。

「それはつぎのようなことになる。われわれは、あなた方に答えよう。怠け者たちは、あなた方に気づかれないように、彼ら自身のためにあなた方を働かせ、そしてさらに、彼らがあなた方に好意と慈悲を示す一方、彼らの享楽のために、あなた方の汗を流させるのを信じさせておこうとする秘密を発見したのだ。この秘密がどういうことであるのか、もう一度よく考えてごらんない。もしあなた方に、その謎がとけそうにもないとしたら、われわれがつぎに出す『ちらし』をまっけて下さい。そのなかでわれわれはあなた方に解答をあたえましょう。

一八三三年一月パリにおいて、

ドイツ人民協会

われわれはつぎに、第一のちらしにおいて約束した問題の解答を、第二のちらしのなかに求めなければならない。そこには何よりも資本家的な搾取機構を克明に分析するとともに、これにたいする手工業職人の闘争の必要性が訴えられているのであって、手工業職人の共産主義 (Handwerksburschen-kommunismus) の思想が萌芽的にあらわれているのを見ることができよう。

(1) 「一八三〇年から一八三四年までのドイツにおける自由主義的活動の新しくはげしい性格は、いまやすでに中間階級がみずから問題をとりあげたことを意味した。しかしドイツは多数の諸邦にわかれており、そのほとんどすべてがそれぞれ別個の関税率をもっているため、これらの運動には利害の一致が存在しなかった。ドイツの中間階級が政治的に自由になることを欲したのは、公事を彼らの利益に合致するように処理するためではなくて、フランス人やイギリス人にくらべて自分たちの奴隷的な地位をはずかしく思ったからであった。彼らの運動には、フランスやイギリスでは自由主義の成功を保証した実質的な基礎が欠けていた。彼らが問題にした利益とは、実際のところより、はるかに理論的なものであった……。」

ところがドイツの中間階級は、既述のとおり、けちくさい仕事をやっている人間であるから、たんなる熱情家——「出版の自由」、「陪審裁判」、「人民のための憲法による保障」、「人民の権利」、「大衆的代議制」等々の讚美者にすぎず、彼らはこれらを手段ではなく、目的と考えたのであった。彼らは影を实体とまちがえた。従ってなにも獲得しなかった。しかし、この中間階級の運動も、数十の革命をもたらすに十分であった。そのうち、二、三の革命はなんとか成功した。すなわち、数多くの大衆的集会、多数の論議や新聞上の宣伝、さらに学生や労働者や農民の間での民主主義運動のごくすかすかなはじまりがそれである。」(傍点筆者。Marx/Engels Werke, Bd. 2, SS. 582—583. 邦訳六〇七—六〇八頁)

「他の都市と同じように、ハノーバーにおいても運動は他の若干の都市にも移っていった。グスターフ・シュトゥーフェ (Gustav Stüve) は、つぎのように描写している。「一八三一年の一月、オスターローデでも、ゲッティンゲンにおいても、暴力行為がおこなわれた。他の都市においても容易ならぬ怒りが支配的となった。根本的な変化がさけられないという確信 (die Überzeugung von der Notwendigkeit tiefgreifender Änderungen) が一般的となった (Jürgen Kuczynski: Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter dem Kapitalismus, Teil I. Die Geschichte der Lage der Arbeiter in Deutschland von 1789 zur Gegenwart. Darstellung der Lage der Arbeiter in Deutschland von 1789 bis 1849, Bd. I, S. 139.)

(2) 一八三二年四月および五月に、自由主義的反対派の急進勢力と温健派との間に新しい綱領をめぐって妥協がなられたとき、ウィルト (J. G. A. Wirth) とズィーベンファイファー (J. Siebenfeiffer) によって、ハイルトのノイシュタット (Neustadt a. d. Haardt) にあるハンバッハ城へ、ドイツの各地からの大示威運動をおこすという計画がたてられた。この町の三二人の市民が署名をした「平和的な会議のために、大きな利益のための断乎たる兄弟の契りのために」(zu friedlicher Besprechung, zu entschlossener Verbrüderung für die grossen Interessen) 五月二十七日にハンバッハに集まろうという、あらゆるドイツの男女にたいする呼びかけを、ズィーベンファイファーが起草した。このよびかけは、あらゆるドイツの愛国者にむけられた。そして、内外の権力を振りおとすため、法的な自由とドイツ国民の尊厳を獲ちとるための闘争をよびかけたのである。一八三二年五月八日、バイエルンの政府が、この計画された祭典の禁止令を発したのみならず、あらゆる外国人に、ハンバッハおよびその周辺に滞在することを禁じたとき、ファルツ (ライン河左岸の州) では、抗議の波がたかまり、そのために政府は、その禁止令を撤回せざるをえなかったのである。日毎に愛国的な激情が増大し、この祖国の祭典への参加のための準備が、すでに五月二十七日以前に南部および南西ドイツの全生活を決定した。五月二十五日のハイデルベルクからの新聞の報道は、全体的な運動について語っていると、多くのドイツの地域からの大衆の合流について描写している。(Karl Obermann: Deutschland von 1815 bis 1849, Von der Gründung des Deutschen Bundes bis zur bürgerlich-demokratischen Revolution, Berlin, 1961, SS. 85—86.)

ハインリッヒ・ハイネは、皮肉な口調で、つぎのようにのべている。「つぎのようなことを予見することは容易である。つまり、共和制という構想は、今日、多くのドイツ人が考えているように、決して一時の出来ごころではないということだ。ブラウンシュウィクやグロッツェ、シュレーラーやサボイからきたウィルト博士やズイトベン氏、シャープやゲオルク・ファイイン氏を、人は逮捕することができし、またそうするであろう。だが彼らの思想というものは、自由のこっているし、あたかも鳥のように空中をとびまわるであろう。鳥のように、それはドイツの櫛の梢に巣くうであろう。そしておそくは半世紀もの長い間、人々は、それについて何もみずた何もきかないであろう。だがついにある美しい夏の朝、神の使いの驚にも似て大きくなり、爪にひらめきもち、公けの市場に姿をあらわすであろう。だが、半世紀もしくはまる一世紀で何とかなるだろうか。人民には充分な時間がある。それは永遠である。王だけが死ぬのだ。(Heinrich Heine, Werke, Bd. 6, S. 230 f. zitiert aus Jürgen Kuczynski's „Die Geschichte der Lage...“ Bd. I, S. 113.)

(3) 一八三〇年の秋には上ヘッセンの農民達は起ち上り、かたまって国中を放浪し、ある所では税関を掠奪し、ある所では郡長の家に放火したりした。この時に当ってドゥーテールは、国会における彼の敗北によって不安にさせられた宮廷における彼の信用を恢復しようとい機会を窺った。彼は大公の舎弟を勇敢なる軍隊の首領となした。この英雄はゼーデル村の竜騎隊をして武装していない農民の集団の間に、予め何の勧告もなしに、切りこませて分散させてしまった。[Franz Mehring: Geschichte der Deutschen Sozialdemokratie, Bd. I, S. 77. (Gesammelte Schriften, Band I.)]

(4) 一八三三年から一八三四年にかけて、フランクフルト・アム・マインおよびその周辺で手工業職人による活発な運動が展開された。日曜日に、彼らは大群をなして近所のクルヘッセンの村へ出かけて、集会を催し、ビラをまいた。一八三四年のはじめフランクフルト周辺の手工業職人の間にひろまった秘密に印刷された革命的な文書のうち、ハインリッヒ・ハイネの『フランスの状態』への序文や『農民の対話集』は、特別な重要性をもっており、非常に好評を博した。(Obermann: ebendort, S. 100.)

(5) Werner Kowalski: ebendort, S. 38.

(6) Kowalski: ebendort, S. 38.

(7) 「ドイツの裁縫師たちはスイスに、ロンドンに、パリに、至るところに住んでいた。パリでは、ドイツ語が、この職業のとおりの言葉になつていくくらいで、わたくしは、一八四六年にパリで、ドロントハイムから、直接海路をフランスへきた一人のノルウェイ人の裁縫師と知り合いになったが、彼は、十八ヶ月間に、ほとんど一語もフランス語をおぼえなかったのに、ドイツ語は立派におぼえた」(C. Engels: Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten, Marx/Engels Werke, Bd. 21, S. 209. 邦訳、大月版「マルクス・エンゲルス選集」第二巻四三二—四三三頁。)

(8) Kowalski: ebendort, S. 39.

(9) Ebendort, S. 39.

(10) Ebendort, S. 42.

(11) この最初にでた「ちらし」については、コワルスキーは何もふれていないが、ドイツ人民協会の初期の活動について知るためには、是非必要であると思われる。史料として、この書の巻末にかかげられていないのは惜しまれる。

(12) こんなわけで、ヤコブス・ヴネディ一派のようないちばんのろまな連中だけがいこのることになったもの同盟は、すっかり眠りこんでしまった。(Engels: Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten, ebendort, Bd. 21, S. 207.)

(13) Kowalski: ebendort, S. 49.

(14) ビェール・ルルーは、産業ブルジョアジーがまだ、資本主義制度での圧倒的優越性を獲得していなかった時期に生活していたので、階級関係を分析するにさいして生産の見地を固守することができなかった。彼はサン・シモン主義者たちと同様に、土地所有者にたいして、企業主とその労働者とを対立させつづけた。それゆえ、彼は、生産要具を持っているか持っていないかによって、階級を区別しないで、占有している国民的富の持分によって区別した。ついで彼は、富の消費の観点に立つことによって、階級関係を分析してゆく。

(15) 「ルイ・フィリップの治下でフランスを支配した者は、フランスのブルジョアジーでなくて、その一分派であり、銀行家、取引所王、鉄道王、炭鉱・鉄鉱・森林の所有者、彼らと結ぶ一部の地主——いわゆる金融貴族であった。これが王座について、両院で法律を口授し、内閣からタバコ専売局にいたるまでの官職を授けた。」(Marx/Engels Werke, Bd. 7, S. 12. 邦訳九頁。)

(16) Kowalski: ebendort, Quellenhang, S. 177. Flugschrift des Deutschen Volksvereins vom November 1833.

三

さきにかかげた一八三三年十一月のちらしには、「手工業職人の共産主義」(Handwerksburschen-Kommunismus)の思想の断片をうかがうことができるのであるが、これこそやがて、ドイツが生んだ非凡にして輝かしい空想的社会主義者ウィルヘルム・ウァイトリング⁽¹⁾(Wilhelm Weitling)の思想を生み出すのである。彼らは、資本主義の発展が職人たちをして独立の親方もしくは工場主たることを絶望的ならしめたことを体験的に認識しつつも、なお小生産者意識からぬけでることができな

正義者同盟成立の歴史的意義(その一)

ったのである。第二のちらしの内容は、その事実をもっとよく物語っている。一八三三年のちらしの末尾になげかけた問題にたいして、翌一八三四年一月の「ドイツ人民協会のちらし」にはつぎのように書かれている。⁽²⁾

「大昔、貧乏人も金持も、そしてまた怠け者もない時代がありました。すべての人は、そこでは自分の手の労働によって幸福に暮しており満足していました。電が降ったために収穫が駄目になったり、猛獣によって家畜がぐいつくされたり、あるいは、病気のために、もしくは罪のない不幸なことに見舞われたりした人には、友好的に分ち合ったのです。その当時には賦役を課する領主も十分の一税をとりたてる領主もいなかったし、無慈悲な工場主や手工業親方もいなかった……。その当時は、働くことと幸福とが、あまねくゆきわたっており、真の平等と同胞愛のきずなが、すべての人間をとりまいていたのです。」

原始共産体への讃美、あらゆる空想的社会主義に特有なロマンチズムが、ここでも色こくにじみ出ている。そしてつぎのようにつづける。

「しかしながら、このような美しい状態は長くはつづきませんでした。何故ならば、非常に巧妙な手段と策略によって、自分の同胞よりも多くのものを獲得することを知った人々がいたからです。これらの人々は、彼らがあつめた貯えをあてにして、怠惰におちいり、怠惰はまた、彼らを悪徳と貧困にみちびいてゆく。その結果彼らは、善良な人々がはげしい労働によって獲得したところのものを、強盗によってとりあげようとして団結するということになったのです。このような強盗団は国中を彷徨し、もつともすばらしい財貨を略奪し、その所有者を屈服させました。そして彼らを奴隷あるいは農奴 (Leibeigene oder Fronknechte) として彼らがかつては、自由なそして正当な所有者として自由に支配していたところで、働きつづけるよう強制しました。」

貧困、搾取、抑圧および不自由にたいするプロレタリア的な告訴が、縷々として訴えられてはいるけれども、貧困や搾取

の原因は、資本主義社会に特有な法則、資本の運動法則——剰余価値の法則の把握の上に探求されているのではないことが特徴的である。それはすなわち、ドイツ人民協会が、純粹にプロレタリア的な政治団体ではなく、小市民的な共和主義者や民主主義が根強く勢力を保有し、プロレタリア的思考の沈溺物が、ドイツ人民協会の内部に、充分に堆積していなかったことを意味していた。この第二の「ちらし」は最後に結論的につぎのようになっている。

「兄弟および友人諸君！ あなたの方の苦悩の根本原因は、現在のように、特定の人々の手中に蓄積された富 (der Reichtum) なのです。工場主とは一体何者でしょうか。富なのです。田畑や森林や牧草地の所有者は何者でしょうか。富なのです。陸上輸送、航海および商業は一体誰の手にあるのでしょうか。立法者とは誰でしょうか、裁判官とは何者でしょうか？ 軍隊や警察を維持している者は誰でしょうか。税金や関税および消費税をあげる者は誰か。賃金を低くし、賦課金によって人民をしほりとする者は誰か。商品や生活必需品を変造してごまかしたり、税金をかけたたりする者は誰でしょうか。礼儀を頽廃させる者、偏見や迷信を誰が播くのでしょうか。大土地所有者としての富、産業家および商人としての富、貴族、大臣としての富、資本家、男爵、放蕩者、坊主としての富なのです。」

このなかでは、搾取者と被搾取者との対立は克明に描かれているけれども、貴族も地主も産業資本家も同じ敵対者として描かれている。階級対立の矛盾を痛烈に感じながらも、資本主義社会の機構から必然的に生み出される矛盾として、階級闘争をとらえることができなかったところに、手工業職人の共産主義者の限界があった。

反動化した七月王朝は、一八三四年、プロレタリア的たるとブルジョア的たるとを問わず、あらゆる民主的な団体に弾圧を加えてきた。フランスの労働者は、ゼネ・ストによってこれに対抗しようとし、リヨンの労働者はすでに一八三一年に公然たる闘争に入⁽³⁾ったが、蜂起の飛躍的發展をさえたものは、主要都市の状態であった。リヨンの武装蜂起が軍隊に鎮圧され、流血のうちに弾圧されたとき、ドイツ人民協会は、みずから弾圧の危険を感じなければならなかった。協会内部におけ

るブルジョアの側の側における「長期服役賛成」は、自由主義者や共和主義者との間にはげしい対立をまきおこし、とりわけ、リヨンの織匠の蜂起と関連して、協会内のプロレタリア的勢力の増大によって、内部矛盾はいっそう激化した。そして七月王朝はその敵を打倒し、フランスにおける外国人団体にたいするテロリズムを開始したとき、ドイツ人民協会は、急速に解散の方向に進んだのである。正義者同盟の先駆的形態としての亡命者同盟は、この人民協会の廃墟の上にうちたてられたのであった(未完)。

(1) 「ドイツのブルジョアジー——彼らの哲学者や著述家をもひっくるめて——は、ブルジョアジーの解放——政治上の解放——について、ウァイトリングの『調和と自由の保証』ぐらゐの労作を、どこかでしめたことがあるであろうか？ ドイツの政治的文書の味のない無気力な平凡さと、ドイツ労働者のこの非凡にしかがやかしい初登場をくらべてみよ。(Engels: Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten, Marx/Engels Werke, Bd. 21, S. 209. 邦訳大月版「マルクス・エンゲルス選集」第二巻四三二頁)

(2) Kowalski; ebendorf, Quellenhang, S. 178 f.

(3) 「一八三〇年から一八四八年までのフランスの『労働者階級』のミラタンスは、主に古い型の都市の工匠と職人、それも大抵の場合、熟練を要する職種と、それにリヨンの絹織物業のような伝統的に家内工業的な下請産業の中心にいたのだ。(第一に革命的なりヨンの Canuts は、賃金労働者であるどころか、小親方の一類型であった)その上にあたらしい『ユートピア』社会主義のさまざまな種類——サン・シモン、フーリエ、カベールおよびその他の追隨者は、政治的運動に関心をもたなかったけれども、事実、彼らの小さな集会やグループ——とくにフーリエ主義者は、一八四八年の革命の当初にあたって、労働者階級の指導と大衆行動の動員者の中核として活躍することができたのである。(E. J. Hobsbawm: The Age of Revolution, Europe 1789—1848, 1963, London, p. 22.)

——一九六四・三・一八・深更——

研究ノート

農業生産函数に関する整理

鳥 居 泰 彦

筆者は、前号(三田学会雑誌、昭和三十六年四月号)において、我が国農家計の農業生産における生産函数計測の理論的意義とその具体的計測の結果を報告した。その際、農業生産函数の計測理論と経験的な計測の発展について学説史的に詳細な整理をおこなうことを省略した。今日の経済分析と農業経営分析においては農業生産函数の概念が、ほとんど常に、最も基本的用具としての役割を演じて居り、その上、農業生産函数に関する議論の歴史はおよそ一〇年以上の長きにわたっている。それ故、これらの議論の中でなされた多くの貢献の意義を整理するにはかなりの紙面を要するばかりでなく、利用の便からも一つの独立した研究ノートとした方がよいと考えて、ここに稿を改めて整理しておくことにした。

いわゆる農業生産函数(Agricultural Production Function)の研究は、二つの異なった方向に沿って発展して来た。一つは、生物学的

農業生産函数に関する整理

生産函数(Biological Production Function)または反応函数(Response Function)と呼ばれるものであり、他は、経済学の分野で一般に生産函数と呼ばれ、上の反応函数と区別して特に Farm-Firm Production Function と呼ばれるものである。生物学的生産函数の研究は、後者にくらべてはるかに古い歴史を持っている。それは元来農業経営における最適要素投入量を技術的(または生物学的・生化学的)に決定することを目的として研究されて来た。それ故、固定された面積の土地の上で、他の多くの条件をコントロールにおいて、特定の投入要素と産出量との間の関係を実験によって明らかにしようとするものである。特定の要素(肥料等)の投入量の変化に対して作物や家畜の成長曲線や収穫量がどのような反応を示すかを明らかにすることによって、特定の当該投入要素に関する限り最適解を得ることができであろう。しかしながら、このことは、生産主体の活動全体として利潤が極大化されたり、費用が極小化されたりすることを必ずしも保障しない。

生産主体の活動全体としての Rational behavior を説明する経済